

連載「巣づくりの住まい」vol. 5

建築学科 准教授 石川恒夫

上毛 平成21年12月 9日 (水)

巣づくりの住まい

⑤

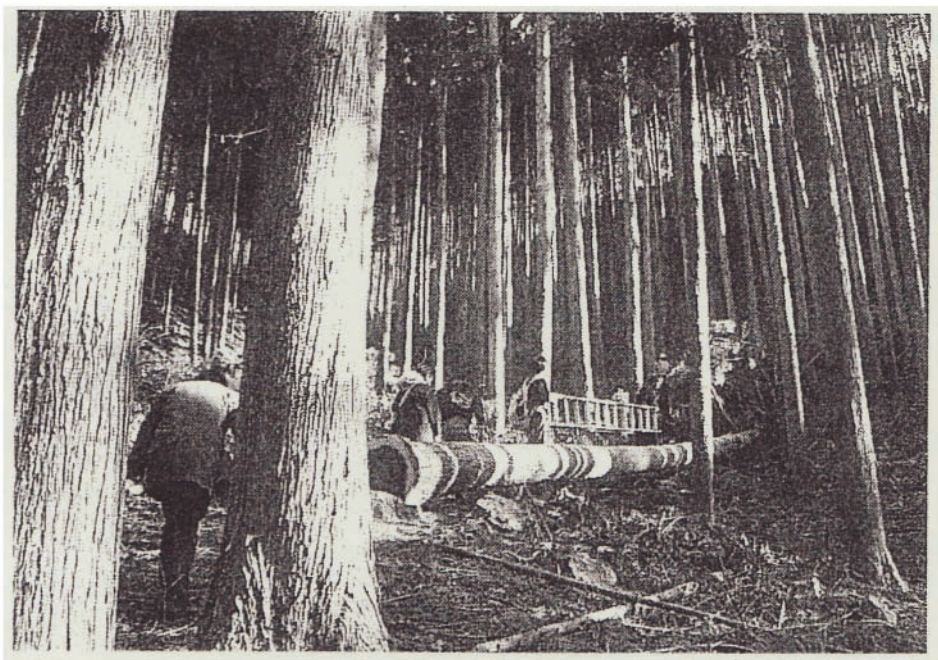
石川 恒夫

巣としての住まいづくりを下ータルにとらえるならば、木をふんだんに使った自然素材は「高くつく」わけではありませぬ。環境も含めた「ライフサイクル」の観点から考えてみましょう。

欧州では、すべてのエネルギーを削減していく動きに伴い、木造および木質材料が見直されています。ドイツ政府は温室効果ガス放出量を2012年までに、1990年比で21%削減という目標を掲げています。各住戸は太陽光発電や地熱などの再生可能エネルギーの導入を進める一方で、暖房、給湯などに必要な消費エネルギーを削減していく方針を立てています。

建設業界では、製造と廃棄時のエネルギーを削

環境考え 地元産木材



輸送距離から見直す

陽の恵みがもたらした木材(木質パネル)を有効活用する方向へと進んでいます。スイス・チューリヒに建てられた木造パ

ートに建てられた木造パ
減するために、コンクリ
ートを極力使用せず、太
ネル工法による6階建て
のマンションは驚きで
す。

も有数の森林保有国であるにもかかわらず、木材自給率は2割を切っているのですから。それなのに現在、遠方の諸外国から膨大な運搬エネルギーをかけて木材を輸入しているのです。

しなればなりません。運送エネルギーも同様です。そのためには自然素材を、しかも、できるだけ近隣から取り寄せるべきです。

日本では「ウッドマイルズ」という環境指標を用いて、「輸送距離」からエコメリアルとしての木材を見直す動きがあります。何しろ日本は国土面積の3分の2を森林が占めるという、世界で

と、光熱費がどれだけ減ったか、二酸化炭素の削減がどれだけ達成されているか、ということが基準で、この数値が良ければ称賛される傾向があります。しかし、これからは製造、運送、廃棄時のエネルギーも考慮しなければなりません。新しい価値観の創造が必要です。もちろん、最も身近な環境保護の対象として健康な住まいへの配慮も忘れてはなりません。そのためにも地元の木材の利用促進が一層求められるのです。

狂いが少なく丈夫な木材が採れると古来から伝わる「新月伐採」。切り倒したのは樹齢55年の杉。下仁田町

(前橋工科大学大学院 准教授)